

話 題

小野澤繁雄

対策で幅が増まされた川土手のその幅までを蝶まが揺れゆく

だらしのない熟柿が好きだったお母さん母の嫌いも後年にしる

渡り切ってはちまんはしと名をしりぬみちの一部が名をもつひとつ

どうかして膝がさむいというような秋の日校庭は走る児童ら

マルちゃんにあうはひさびさ近所ではハルちゃんが話題にもなる

声がして声する方に向く歩き散開をして児童ら声は

ローラーをかけていたのは中一で庭球場に以降縁なし

うお座には魚が二匹はしらざりき複雑な歩道橋絵のみちびきに

犬の名をしるのみにして名を呼べばまさかにも飼主のよろこぶ

子どもから犬を預かることのある親の一人と少しを歩く